

『大つごもり』 『新日本古典文学大系—明治編—24』より 樋口一葉著 岩波書店 (918.6) 『樋口一葉加筆版』より 樋口一葉原作 大伴茫人加筆 梧桐書院 (F1 ヒク) 奉公中のお峯は両親に代わりの伯父に頼まれて、奉公先に2円の用立てを願う。	『決戦!忠臣蔵』 葉室麟著ほか 講談社 (F1 ケツ) 「鬼の影」「妻の一分」「首無し幽霊」「冥土の契り」など、忠臣蔵を赤穂側目線や吉良側目線からなど、取り巻く人々の視点から描く、短編集。	『素敵な日本人 —東野圭吾短編集—』 東野圭吾著 光文社 (F1 ヒカ) 正月、バレンタイン、雛祭り、クリスマスなど、日本人の年中行事を題材にしたミステリー短編集。	『そば—アンソロジー』 池波正太郎著ほか パルコエンタテインメント 事業部 (F1 ソハ) 檀一雄の「わが家の年越しソバ異変」をはじめ、江戸そばから各地方のそばまで、38編のエッセイアンソロジー。
『チーム』 堂場瞬一著 実業之日本社 (F1 トウ) 予選落ちした選手たちで構成される学連選抜チームが、箱根駅伝で優勝を目指す。シリーズはⅡ・Ⅲと外伝2冊がある。	『ディオゲネス変奏曲』 陳浩基著 稲村文吾訳 早川書房 (F2 チン) 「サンタクロース殺し」「今年の大晦日は、ひときわ寒かった」などホラー、ミステリー等が17編。	『日本古典をよむ 18 世間胸算用』 井原西鶴作 小学館 (Y918) 「貧の意地」『お伽草紙』より 太宰治著 新潮社 (F1 タサ) 江戸時代、大晦日は生きるため商人和庶民の攻防が繰り広げられる日だった。「貧の意地」は「世間胸算用」を太宰治がアレンジ。	『非道、行ずべからず』 松井今朝子著 集英社 (F1 マツ) 文化六年元旦、江戸最大の劇場中村座が炎上。跡には焼けた跡のない死体があった。歌舞伎界を描いたミステリー。花伝書シリーズは他に2作。
『冬ごもり』 池波正太郎著 宮部みゆき著 松本清張著 宇江佐真理著 山本一力著 南原幹雄著 縄田一男編 KADOKAWA (F1 ナワ) 「正月四日の客」「鬼子母火」など、冬をテーマにした江戸時代もの短篇が6編。	『孫と私の小さな歴史』 佐藤愛子著 文藝春秋 (F1 サト) 1992年から20年間、佐藤愛子が孫の桃子とトトロや海賊などの扮装姿で作り続けた写真付年賀状とその撮影秘話。	『まぬけなこよみ』 津村記久子著 平凡社 (F1 ツム) 一年の二十四節気、七十二候をテーマに、著者の思い出や日常のちょっとした出来事が描かれている。ゆとりと肩の力を抜いて楽しめるエッセイ集。	『レッドスワンの絶命』 綾崎隼著 KADOKAWA (F1 アヤ) かつての名門高校サッカー部は廃部寸前。女性新監督を迎えて、冬の「全国高校選手権」を目指す。続きに『星冠』と『奏鳴』がある。



すきま時間に読みやすい短編を中心に、クリスマスや年末年始が舞台の本を集めました。

何かと忙しい年の瀬ではありますが、「ほっと一息」読書を楽しみませんか。

() 内は請求記号です。

多摩市立図書館

クリスマスが舞台

「ある夜の物語」 『未来いそっふ 改版』より 星新一著 新潮社 (F1 ホシ) クリスマス・イブ、青年は今年も恋人ができずに一人で部屋にいたが、ふと、そばに人の気配を感じる…。ショートショート。	『追跡のクリスマスイヴ』 メアリ・H・クラーク著 深町真理子訳 新潮社 (F2 クラ) クリスマスイブのニューヨークで、ママが落とした財布が見知らぬ女性に拾われた。7歳の少年は、とっさにあとを追いかける。	『クリスマス・キャロル』 チャールズ・ディケンズ著 井原慶一郎訳・解説 春風社 (F2 テイ) クリスマス・イブ、強欲な老人スクルージの前に幽霊が現れ…。ディケンズ公認の挿絵 25 点。	『X'mas Stories』 朝井リョウ著 あさのあつこ著 伊坂幸太郎著 恩田陸著 白河三兔著 三浦しをん著 新潮社 (F1 クリ) クリスマスをテーマに少しホラーからほっこりする話まで、大人のクリスマスを 6 編楽しむことができる。	『クリスマスツリー』 ジュリー・サラモン著 ジル・ウェーバー絵 中野恵津子訳 新潮社 (F2 サラ) ロックフェラーセンターの造園管理部長の一番の仕事はクリスマスツリーの木を探すこと。ヘリコプターで見つけた木は修道院にあった。	『クリスマスの思い出』 トルーマン・カポーティ著 村上春樹訳 文芸春秋 (F2 カホ) 親戚の家に預けられた7歳の少年は60過ぎの女性と親友になる。冬の気配が立ち込める朝、2人は協力してクリスマスの準備を始める。
『クリスマスを探偵と』 伊坂幸太郎文 マヌエーレ・フィオール絵 河出書房新社 (F1 イサ) クリスマス・イブ、浮気調査対象者をベンチで見張る探偵は、横に座っていた男に促されるまま、少年時代を振り返る。ファンタジー。	『さやかに星はきらめき』 遠藤周作[ほか]著 日本基督教団出版局 (F1 サヤ) 森礼子、津島佑子、阪田寛夫、大原富枝、椎名麟三等、キリスト者の作家らが寄せたクリスマスエッセイ集。	『サンタのおばさん』 東野圭吾作 杉田比呂美画 文芸春秋 (F1 ヒカ) 毎年恒例世界中のサンタクロースが集まる会議の今年の議題は、会長サンタの後任者の選出。現会長が推薦したのは、女性だった。	『シネマコンプレックス』 畑野智美著 光文社 (F1 ハタ) ショッピングセンター内のシネマコンプレックスで働く部署ごとのスタッフの間関係や境遇を交えつつ、クリスマス・イブの 1 日を追う連作短編集。	『スキッピング・クリスマス』 ジョン・グリシャム著 白石朗訳 小学館 (F2 クリ) 会計士夫婦はクリスマスの出費を抑えるべく、クリスマス時期を海外で過ごす計画を立てるが、町内を巻き込んだ大騒動となる。ドタバタコメディ。	『太陽の塔』 森見登美彦著 理論社 (F1 モリ) 京都大学休学中の主人公「私」は、初めての恋人を長く「研究」していたが、クリスマス前に振られる。嫉妬と妄想から友人達とイブに行動を起こす計画をする。
『チェコの十二カ月』 出久根育著絵 新潮社 (F1 テク) 「シュチェドリーデン (クリスマス・イブ)」など、チェコのクリスマスを感じることができる。チェコに住む著者が 11 年間に渡り記したエッセイ集。	『飛ぶ教室』 ケストナー著 丘沢静也訳 光文社 (YF2 ケス) 寄宿学校高等科 1 年の個性豊かな少年達。クリスマスに上映する劇を稽古中、友達が他校の生徒に捕まったと聞き、助けに行く…。	『冬の灯台が語るとき』 ヨハン・テオリン著 三角 和代訳 早川書房 (F2 テオ) スウェーデンの離島に移住した家族が不幸や不可解な出来事に苦しめられていく、ミステリー。シリーズ 2 作目だが単品でも楽しめる。	『ポアロのクリスマス』 アガサ・クリスティー著 村上啓夫訳 早川書房 (F2 クリ) クリスマス目前、ポアロはある富豪の自邸に呼びつけられる。富豪の一族が集められていた邸宅内で当主が殺される。	『星の民のクリスマス』 古谷田奈月著 新潮社 (F1 コヤ) 小説家の父は、4歳の娘のクリスマスプレゼントに物語を贈った。惹きつけられた娘は10歳のクリスマス・イブに、物語の世界へ家出する。	『昔なつかしいクリスマス』 ワシントン・アーヴィング著 ランドルフ・コールデコット挿絵 齊藤昇訳 三元社 (F2 アウ) 1819～1820 年にアメリカで出版された『クリスマス・ブック』から、5 編。古き良き時代のクリスマスが楽しめる。